

人間文化研究機構国文学研究資料館

令和6（2024）年度第1回運営会議 議事要旨

- 【日時】 令和6（2024）年6月26日（水） 15：30～17：45
- 【場所】 オンライン会議「Zoom」
- 【出席者】 安藤、入口（議長）、大山、岡崎、川平、神作、木越、久富木原、倉員（副議長）、齋藤、佐藤、鈴木、田渕、張、遠山、西村、ヒューイ、藤實、山地、山本和明、の各委員
- 【欠席者】 八木、山本聡美の各委員
- 【陪席者】 渡部館長、秋庭管理部長、笠原総務課長、姫野財務課長、片岡学術情報課長、その他関係職員

議事に先立ち、渡部館長から挨拶があった。

笠原総務課長から、会議の定足数について、運営会議委員22名のうち、欠席者は2名であり、そのうち外国出張による欠席は1名で、過半数11名以上となり、20名出席しているため定足数を満たしている旨報告があった。

議長に入口委員が、副議長に倉員委員が、それぞれ選出された。

続いて、本年度より新たに就任された委員がいることから、各委員から自己紹介があった。

議 事

- 【前回（令和6（2024）年2月22日）運営会議議事要旨の確認】
原案のとおり了承された。

【審議事項】

1 館長候補者の推薦について

（資料1）

秋庭管理部長から、渡部館長の任期が今年度末を以て満了するにあたり、次期館長の選考を行うこと、併せて、選考スケジュール及び推薦方法について、説明があった。

また、入口議長から、これまでの館長選考と異なり、「国文学研究資料館長に求められる人材像」を確認しながら選考を行うこと、被推薦者が会議の場で急な推薦を受けることを避けるため、「応諾書」、「所信表明書」の書類も提出いただくこととした旨補足説明があった。

審議の結果、選考スケジュール及び推薦方法は、了承された。

続いて、秋庭管理部長から、運営会議に設置する館長候補者選考委員会について説明があった。

この説明を受け、入口議長から、館外から安藤委員、山本（聡）委員、館内から入口議長、齋藤委員、西村委員を選考委員として選出したいとの提案があり、審議の結果、了承された。

また、同じく入口議長から、次回の運営会議において館長選考を行うため、運営会議委員の4分の3（17名）以上の出席が必要であり、委員には可能な限り出席していただきたいとの発言があった。

2 客員教授の選考について (資料2、取扱注意資料)
神作委員から、令和6(2024)年10月1日付着任客員教授の選考について説明があり、審議の結果、了承された。

3 人事協議会委員の選出について (資料3)
入口議長から、人事協議会委員として、館外から倉員副議長、田淵委員、館内から神作委員、岡崎委員、藤實委員を選出したいとの提案があり、審議の結果、了承された。

【報告事項】

報告に先立って、令和6(2024)年4月1日付以降に着任した研究教育職員及び特任研究員の4名から挨拶があった。

1 研究教育職員等の人事について (資料なし)
渡部館長から、令和7(2025)年4月1日付で、日本古典文学において、上代・中古・中世いずれかの散文を専門とする教授又は准教授1名、X線による古典籍の科学的解析(マテリアル分析)を担当する特任助教1名、情報学又は人文情報学を担当する特任准教授または特任助教若干名を公募により採用する予定であるとの報告があった。

2 データ駆動による課題解決型人文学の創成 令和6年度事業計画について (資料4)
入口議長から、令和5(2023)年度までで、10年間の大規模学術フロンティア促進事業である「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」が30万点の画像データ作成の目標を達成し終了したこと、令和6(2024)年度から10年間の新たなフロンティア事業として「データ駆動による課題解決型人文学の創成」(略称「国文研DDHプロジェクト」)が認められたことの報告があった。

続けて、入口議長から、国文研DDHプロジェクトの事業計画について、館内にプロジェクト推進室を設置し、新しい画像データを作成すること、これまで収集した画像データをOCRによりテキストデータ化すること、さらにその中から校正テキストデータの作成・公開まで行いたいとの説明があった。また、異分野融合によるデータ駆動型研究で、大量のデータを利用した研究方法等について模索していくとともに、今年度中に微小部X線装置を導入し、来年度から先端研究支援ラボにおいて、マテリアル分析を行う予定である等の説明があった。

同じく入口議長から、国文研DDHプロジェクトのキックオフ・シンポジウムを12月1日(日)に一橋講堂において開催するとの報告があった。

本件に関して、以下のような質疑応答があった。

(1) 山地委員から、国文研DDHプロジェクトの事業のターゲットについて、海外に国文研と同様の組織があるのであれば、その組織が行う事業のターゲットとの共通点・相違点は何かという質問があった。

入口議長から、日本文学に関する研究センターは海外には存在しないという認識であり、日本独自の国文学研究機関が推進していく点で、国文研DDHプロジェクトはユニーク

な事業といえるとの説明があった。

- (2) 山地委員から、異分野融合によるデータ駆動型研究について、代表的な事例やノウハウを教えていただきたいとの質問があった。

入口議長から、「歴史的典籍 NW 事業」における国立極地研究所とのオーロラに関する共同研究等が事例に挙げられると説明があった。

山本和明委員から、異分野との共同研究について、分野ごとの成果発表方法の違いを受入れるまでに時間がかかること、研究成果を双方に偏りなく共有できるようにすることが難しい点であり、これらのノウハウをいかに共有していくかが大切であるとの説明があった。

また、大山委員から、異分野融合のデータ駆動型研究について、昨年度までの NW 事業では、古典籍を異分野研究で利用してもらう外向きのアプローチが多かったが、今後は他分野の知見を人文学に取り入れるアプローチがもう一つの要点になるだろうとの説明があった。加えて、データの蓄積と共有も必要であり、色々な機関とも連携していきたいとの説明があった。

- (3) 川平委員から、OCR によるテキストデータ化について、データ化するテキストの選択はどのような基準のもと、何を優先して行われるのかとの質問があった。

入口議長から、OCR によるテキストデータ化の段階では、基本的にはジャンル等を選ばずに全てを対象とし、校正テキストデータを作成する段階で、ジャンルを厳しく選定していく旨の説明があり、どのようなジャンルの校正テキストデータが必要か、委員の先生方にも意見をいただきたいと説明があった。

3 共同研究等について (資料 5)

神作委員から、今年度から基幹研究 1 件、特定研究 2 件を開始するとの報告があった。

4 令和 5 年度事業報告について (資料 6)

岡崎委員から、学術資料事業部の事業について、新型コロナウイルス感染症の 5 類移行に伴い、感染症流行前に戻した閲覧室の運用、学術資料事業部の下に「地域資料専門部会」を設置した上での日本文学関連資料及びアーカイブズの調査・収集、国書データベースへの各データベースの統合及びデータの追加、日本古典籍講習会の事前申込制による Web 配信等の報告があった。

藤實委員から、国際連携部の事業について、国際日本文学研究集会や文献資料ワークショップによる次世代育成、海外の学術会議における企画及び海外機関との学術交流協定の締結・更新による国際ネットワークの充実、国際連携室を編集委員会の基盤として年 1 回行う英文オンライン・ジャーナルの刊行、という 3 つの柱に取り組んでいる旨報告があった。

西村委員から、資源活用連携部の事業について、共同研究の成果公開として「正宗敦夫と正宗文庫」の関係展示、新型コロナウイルス感染症の 5 類移行に伴う展示室の入室制限をなくしたこと、電子展示室の公開、アーカイブズ・カレッジや大学支援による人材育成、地域連携及び社会連携による共催展示やワークショップ等、当館 Web サイトのリニューアル、人文知コミュニケーションの採用等の報告があった。

木越委員から、電子情報部の事業について、館内ネットワークを中心とする環境の整備、データベースを中心とするコンテンツの管理としてデータベースを8つに統廃合し、廃止したデータベースをリポジトリ上などにおいてデータセットとして公開したこと、人間文化研究機構の統合検索システム nihuBridge やジャパンサーチへの参加、国書データベースの利用促進を目的とした広報活動等の報告があった。

5 大学院教育について (資料7)

齋藤委員から、特別共同利用研究員及び総合研究大学院大学日本文学研究コースの学生等の受入状況等の報告があった。

6 その他

(1) 令和6年度の催し物について (資料8)

入口議長から報告があった。

【当館へのご意見等】

(1) 田淵委員から、国書データベースの認知度の向上について、教育現場での使用機会を増加させることが効果的であるとの意見があった。

渡部館長から、より多くの方に古典に触れていただくため、コミュニティの協力を得ながら取組をぜひ進めたいとの説明があった。

入口議長から、今年度の運営会議の日程について、以下の説明があった。

第2回目 令和6(2024)年10月22日(火) 15時30分から対面で開催

第3回目 令和7(2025)年 2月21日(金) 10時00分からオンラインで開催

以上